

笑顔は選挙に影響するか？

選挙ポスターの「笑顔度」と選挙結果の実証研究

—— 浅野正彦

拓殖大学政経学部教授

実証政治学とは

皆さんは「実証政治学」という学問分野をご存じでしょうか。「実証政治学」とは「一般には……と言われているが、本当はどうなのだろうか？」という問題意識で「事実に基づいて」社会現象の因果関係を確定しようとする学問です。

実証政治学に基づく分析の最大の関心事は「因果推論」です。社会科学における因果推論とは、社会的現象を「原因」と「結果」という視点から考えることです。例えば、酒を飲めば（原因）酔っ払う（結果）、投票箱数を増やしたら（原因）投票率が上がる（結果）というのはいずれも因果推論の一例です。この因果推論という視点から、様々な興味深い研究成果が発表されています。

例えば、日本の衆議院選挙で掲示されたポスターに映っている候補者の「笑顔

度」をオムロンの「OKAO VISION」という顔認証ソフトを使って計測した結果、笑顔の候補者の方が、そうでない候補者よりも多く得票するという研究成果があります。選挙において笑顔が候補者の得票に与える影響力は、オーストラリアの候補者の方が日本の候補者よりも二・三倍も大きいことがわかりました。

選挙ポスターの「笑顔度」調査

ところで、筆者は、全国に住む友人や知人をお願いして、七月十日に実施された参議院選挙（選挙区）の候補者のポスターを収集しました。集めたのは実物のポスターではなく、投票所前に掲示されているポスターをスマートフォンで撮影した画像ファイルです。このようにして集めたポスターの画像ファイルを、オムロンの顔認証ソフトを使って、百六十八

人分の候補者の「笑顔度」を測定しました。

笑顔度は〇%から一〇〇%までの尺度で測定でき、図一はその一例です。左端の金子洋一さんは笑顔度が〇%、真ん中の島尻あい子さんは中程度の笑顔の五〇%、そして右端の三原じゅん子さんの笑顔度は一〇〇%と顔認証ソフトは評価しています。

では、百六十八人の参院選候補者の「笑顔度」の分布はどうなっているのでしょうか。

百六十八人の立候補者のポスターの笑顔度の分布は〇%と一〇〇%に二極化しており、笑っているポスター（ここでは笑顔度九〇%以上とします）が九十八人（五〇%）、全く笑っていない候補者が六十九人（三五%）でした。選挙ポスターは、候補者が有権者に対して好印象を与えることを目的としていると思われるが、全く笑っていない候補者が三五%もいるというのは意外です。

笑顔と投票・得票

さて、ここで気になるのは、ポスターで笑顔の候補者はより多く当選しているのか、ということですが、

図一の三人に限れば、笑顔度〇%の金子洋一さんは落選、笑顔度五〇%の島尻

図1 候補者の「笑顔度」の実例



あい子さんも落選、笑顔度一〇〇%の三原じゅん子さんは当選という結果ですが、筆者が百六十八人の候補者の「笑顔度」と参院選の結果を分析したところ、全く笑わない候補者の当選率は三七%。笑顔の候補者の当選率は三九%でした。要するに、笑顔の候補者の当選率が若干高いものの、当選率において両者にはほ

とんど差がないということです。

しかし、だからといって「候補者ポスターは選挙結果に影響を与えない」と即断できません。ここでは候補者の「当落」と候補者の笑顔度の関係を見ていますが、候補者の「得票率」と笑顔度との因果関係を否定できないからです。また、選挙結果はポスターの笑顔度だけでなく、候補者の所属政党や性別、年齢、訴える政策、選挙区の人口密度など様々な要因から影響を受けると考えられます。そのため、笑顔度と選挙結果の因果関係を確定するためには、選挙区や候補者に関する様々な要因を慎重に考慮した本格的な統計分析を行う必要があります。今回の選挙については、もう少し待たねばならないということです。

ちなみに、過去の選挙については筆者も実証分析しています。二〇一五年五月に実施された政令指定都市議会選挙における千三百七十九人の候補者を対象に、選挙公報に掲載された候補者の笑顔度を測定し、得票率との関係を実証分析しました。その結果、候補者の笑顔が得票率に影響を与えるのは都市度の高い政令指定都市でのみ見られる現象で、都市度の低い政令指定都市では候補者の笑顔が得票率に影響を与えていないことがわかりました。

一般に、笑顔などの好感度が高い方が選挙に有利だと言われますが、本当にそれが結果に結び付くのかどうかは、実証分析を積み重ねる必要があります。

因果推論と実証分析の重要性

世の中には様々な主張が溢れていますが。例えば「憲法九条があるから日本は平和なのだ」「日米安保条約があると日本は戦争に巻き込まれる」などという主張も、実は「原因」と「結果」という観点から「本当にそうなのか？」という問題意識で慎重に実証分析する必要があります。複雑な社会現象において因果関係を特定するという作業は決して容易ではありませんが、学問的な研究業績を通じて、慎重に判断する必要があります。

かつて、小林秀雄は「信じる」と「知ること」という講演で「知ること」は、いつでも学問的に知ることです。僕は知っても、諸君は知らない。そんな知り方をしてはいけません。しかし、信ずるのは僕が信ずるのであって、諸君の信ずるところとは違うのです。「(学生との対話)」と言っていきますが、実証分析はまさにここで氏が言うところの「知る」ためのひとつの有益な方法なのだと思います。